
【罪】の謎

凛莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【罪】の謎

【Nコード】

N9549W

【作者名】

凜莉

【あらすじ】

この国には解いてはならない事件があった
なんの事件かは知る人はいない
それが【罪】そして不思議な現象を
人は「【罪】の謎」と呼んだ
私はそれを解いてみせる
そんな意気込みとは裏腹に、
少女が迷い込んだのは不思議な世界でした

楓のメモ（前書き）

こちらは登場人物とか、魔法名とかです
どんどん追加されていくのでお楽しみに！

楓のメモ

登場人物

主要人物

ほんみょうかえで

本明 楓 ♀ 16歳、高1

一言メモ：魔王とか世界よりも【罪】の方に興味がある人

【罪】の謎を知り行方不明？

おおぐちひより

大口 妃和 ♀ 15歳 高1

一言メモ：素直だけど柔道4段の強者 タツクルは痛い 【罪】の謎を知り行方不明？

アウロールーナ ♀ 多分16歳 多分高1

一言メモ：強い エルフと獣人のハーフ。ヒューニマル可愛い 魚を見ると・・・？

オリスラ・リオン ♂ ？

一言メモ：照れ屋だけど強いシアン とにかく強い 強い

シーロンア ♂ ？

一言メモ：軽い獣人ヒューニマル魔法が強い とても強いがオリスには弱い

リオ ♀ ？

一言メモ：かなりの猛者 元盗賊 二刀流で戦う

カンゼ ♀

一言メモ：風の精霊 今は精霊使いによって保護されている

アインゼ ♀

一言メモ：氷の精霊　今はカエデ達と行動している　暑い所が苦手

ファイリア　♀

一言メモ：火の精霊　こちらカエデ達と行動中　水が苦手

ゼリテ・ミータ？　？

一言メモ：アウロの本当の名前それ以外不明

脇役的人物

ガルモスⅡルーリ　♂　多分40代

一言メモ：「始まりの村」にある学校の理事長　綺麗で物知り。

スズ・エルサ　♀　年齢は教えません！！

一言メモ：SSランク担任　真面目だけど天然で面白い人

ショウⅡネ　♀　普通秘密でショウ？

一言メモ：名前の通り「くしょう」となるとカタカナになる　外国
人っぽい人

アイシアⅡアイズ　♀　・・・9

一言メモ：愛想はない喋り方だがかわいい　体温は氷のように冷たい　氷の谷の姫

ファイン・ル・イアン　♀　年齢を聞くとは、無礼者！

一言メモ：火の谷の女王、気高く美しい人　老けてなどいない　体温は火のように暖かい

く魔獣　モンスターく

バツメ：ツバメに似てるからこの名前　凶暴　学校にしか住んでない珍しい魔獣

スライム：いつもの弱いモンスター　たまに綺麗な玉を落とす

ファイアドラゴン
火竜：強いくウロコが赤い　そして少し小さめ　氷や水に弱い　火を吹く

まよいびと
迷人：元人間　迷いの森で迷子になり餓死した者の亡霊

死神：あの世へ送られる

???：うるさい、形はアメーバのように変わり、透明化も可能
生気を吸い取り　魔法は受け付けない

（魔法集）

魔力：^{マナ}全ての魔法に使う　修行等で多くなる

クリスタルルーム
水晶空間：水晶型の収納棚のようなものいくらでも入る

アイスボール
氷球：初歩的な魔法　5回までチャージ可、氷属性魔法なら重ねて使ってもOK

アイススレーア
氷槍：少し扱いづらい魔法　槍のような鋭い氷で敵をひとつき凍らせる

ヒール
回復魔法：その名の通り怪我や病を治せるが魔力をたくさん使う
ウォーターウォール
水の壁：水の壁　水属性なので火属性とは使えない

敵を囲むのも自分達を守るのにも有効防御魔法では比較的楽だが少し弱い

ミニマム・ルーム
圧縮部屋：目では見えない家　キーワードを言う中に入れる絶対

安全のはず

ファイアアロー
火槍：火の槍　敵を囲んで燃やし尽くす　水属性に弱い

ウォーターアロー
水矢：水の弓から矢1本と水の矢数十本が上から降ってくる　冷たい
ファイア：人や物の術を解くことができる　ただし下級分解魔法なのであるアイテムが必要

ホット
暖：暖をとるための魔法　火がなくてもあつたかい便利な魔法

シャインド

幻影：髪色から目の形、声まで変えられる 1日は持つ

ガイン

融合：その名の通り物と物を融合できる 精霊と武器をあわせると

精霊武器になる

リバー

実体化：精霊武器専用、唱えたと精霊が出てくる 1日3回

オウカ・クサリ

桜華・鎖：精霊使い専用、上から下からと桜や花の花びらの鎖で動

きを封じる

ホーリアロー

光矢：エルフが得意 光でつくった弓矢 死神系には大ダメージ

ライトフラワー

光花：エルフが得意 光の玉が花火のように爆発 死神系に大ダメ

ージ

ライトゲート

天門：光の門をつくり 迷人を天へ還す

まよいびと

ライト

光：周りを明るくする 暗いところには有効 魔力も省エネ（笑）

ダークボール

黒球：闇のように禍々しい球 威力は絶大

くメモ帳

種族は4種類 一人間とエルフ 獣人とシアン

ヒューニマル

人間は私とか エルフは耳が少し特徴的で美形が多く、射的天才ばかり

ヒューニマル

獣人は耳やシッポ、手足が猫や犬、など動物の形だが他は人間。魔法が得意

シアンは珍しく、何をやっても天才 特徴は白っぽい目。だが数は少なくなってきた

精霊武器というのは精霊と武器を融合させたもの ほっといたら武器から声が出て会話可能

迷いの森 迷う・果てしなく 出口に出ると砂漠になっている

く今の姿

カエデ・・・髪色：銀髪 目色：黒 髪型：ロングっぽい 身に着けてるもの：軽鎧 短剣 ネックレス

アウロ・・・髪色：金髪 目色：青 髪型：ロング 身につけてるもの：軽鎧 弓矢 短剣

オリス・・・髪色：黒髪 目色：クリームっぽい白 髪型：肩に着

く位 身につけてるもの：ローブ以外不明

シー・・・髪色：茶髪 目色：青 髪型：肩よりも少し上 身につけてるもの：布の服 杖 短剣

ヒヨリ（ヨヒリ）・・・髪色：白 目色：緑 髪型：セミロング 身につけてるもの：ローブ 布の服その他不明

リオ・・・髪色：灰色 目色：黒 肌色：褐色 髪型：超ロング（一つに結ってても）身につけてるもの：丈夫で動きやすそうな布の服
ゼリテ・ミータ・・・髪色：黒 目色：紫 髪型：セミロング 身につけてるもの：黒いローブ以外不明

シャイン
下
（幻影後）

カエデ・・・髪色：金髪 目色：茶 声：普通より低い

アウロ・・・髪色：黒髪 目色：青 声：普通

オリス・・・髪色：茶色 目色：茶色 声：普通

シー・・・使わないので論外

リオ・・・使わないので論外

ゼリテ・ミータ・・・^{シャイン下}幻影前のアウロと同じ姿

第1話 こじはどじ？

罪？ わるいこと 謎？ ふしぎなこと

よのなかにはまだむずかしいことがいっぱいある

このくには「罪」といわれるじけんがある

それにはなぞがいっぱいなんだ

わたしはぜんぶといてみたいな

それがわたしのゆめ

「おおーういかーえでーえ！」

「ゴヘアツ」

突撃したのは幼馴染の大口妃和 これで「ひより」らしい。

面倒なので「ひよ」って呼んでる。

「あっちゃー、ごめんねー楓（笑）」

笑いながら謝ってる。 さっきのタックルは彼女お得意のもの、痛い。

軽く頭をポカリ。

「えへへ・・・ 楓はさっきから・・・本？なんの本？」

「んー、いつもの」

「へー」

私の名は本明 楓 自称探偵である。 とりあえず高1です。

この国・・・というか街にはある一つの事件がある

解けないし解いてはいけない 解いたものは 消えてしまう

【罪】 という名の事件

私はその謎を解くのが夢・・・

「あ・・・」

私は小さく声を出す。

ひよは見ようとすることを私は止めることに

「見ちゃ駄目！」

「なんで？」

急に大声をだされて驚いてるひよ

パターン・・・

私は読んでいた本を閉じた そのページにはしおりが挟んであった。

「どうしたの？」

ひよは聞く

「・・・」

私は答えない

でも答えなきや

「そのしおりが挟んであるページには、【罪】の謎が書いてあった」
つまり、私は消える

「私は平気 どこに行くのか知りたいもの・・・」

「そんな・・・」

ひよの声をかき消すくらい大きなチャイムの音

そしてチャイムの音が止むと同時に

私は消えた

「・・・楓？」

頭が痛い ここはどこ？

真っ暗な闇の中・・・？

「う・・・」

急に光が差し込んでくる

目の前に見えるのは・・・村？

どこかで見たことがあるような、ゲームのような世界だった
広場らしいところに私は立っていた

「うおおお勇者様ああああ！！！」

「！？」

人だかりができる。だがこの人のテンションはおかしい。
んで、勇者？頭がどうかしているのだろうか

「うおおおおおおお本物だああああ！！！！！」

「勇者様ああ！」

ここの人はテンションおかしいのだろうか
とりあえずまとめ

【罪】の謎を知ってしまい消えた

目覚めると村に

んで村人（？）に囲まれて

今・・・か

どうなってるんだこりや・・・

「ちょ、ちよつと待ってください・・・私は勇者じゃありません！」

「何を言っているのですか！ その服！貴方様が勇者様でしょう！」

「は・・・服？」

着ているものを見る

「なんだこりやあああ！！！」

動きやすく軽い鎧 一つのまにやらついている髪飾りやネックレス。

腰には短剣

まてまて、私はさっきまで学校の制服だったはずだ・・・

てか、ネックレス光って・・・

「やっぱり貴方様は勇者様だあああパーティーの用意はまだかあ

ああ！？」

うるさい

さっきからなんだ・・・

第1話 ここはどこ？（後書き）

初投稿で色々拙いところがあつたり、誤字脱字があるかもです。
楽しんでくれるといいなあ・・・

さあ、罪の謎を知ってしまった楓ちゃん。どうなることやら
彼女の苦悩は続く・・・？

第2話 現状把握しました

さて・・・どうしたものか・・・

面倒なことになったなあ

本でかいし重いし

水晶玉にしまっちゃえ

よし、どこか別なところへ行こう

うん、そうしよう

辺りを確かめて・・・

ダッシュ！

向かい風だよ・・・痛い

風が痛い・・・

うん？鏡？

全身を見ておこう・・・

止まろうとしたけど止まらなかった

お母さん・・・車がすぐ止まらないって意味、やっと分かったよ・・・

高1にして・・・

鏡を見て私は絶句した

「な・・・なにこれ」

茶色がかった黒髪が　銀髪になりました。

どうなるんだ私っ・・・

とりあえず髪飾り似合っていないので

むしりつつ捨てた

「あれ？勇者？」

やばい、見つかった・・・
と思ったら後ろにもう追っ手がいました。

「勇者様っ！どこへ行ってたのですか！」
逃げてただけです

話は無視して質問してみようかな？

「ねえ、ここはどこ？んで何が起こってて私はなんでこうなったんの？」

「ここは「はじまりの村」といいます、そして今・・・」
「ブフツ・・・」

笑いこらえきれないよ・・・ゲームみたいじゃん・・・

「いいですか？」

私は何回も頷く

「今、魔王が復活してしまい、世界を乗っ取られてしまつのです・・・
そして

貴方様が【罪】の謎を解いたので、こちらの世界に来たのです。」

「じゃあなんでこんな服と髪なの？」

「それは貴方様が勇者だからですっ！！」

自信満々に言われても・・・

答えになってないし

そして2時間弱という長話に付き合わされた
とりあえずザックリ言つと

魔王が復活！世界が危ない、というところで私があの本で【罪】の
謎を知つて

ここに来た こんな姿なのは勇者だから、らしい。

そして私は

魔王を倒せば帰れる

よし、魔王様ね

んで、長話の中に、「勇者様はまだ未熟なのでこの地図に従い学校へ向かってください」か

以外とでかいな、ここ

さっさと帰るためにも行くかー

学校かー・・・ひよ今何してるかなー・・・

第2話 現状把握しました（後書き）

とりあえず1話目に少し小さな黒歴史ができました・・・

そしてそんな2話目

楓ちゃん鏡みるまで髪の毛の色もわかんなかったみたいです
次回は少し進展する予定です

第3話 友達

「こ・・・こか・・・」

走りすぎたせいで息が・・・

「・・・でかつ!？」

普通の学校の学校の2倍はあるだろう・・・
うん?何か書いてある?

『いらつしゃいませ、勇者様』

あー・・・うん、想像はしてたよ
中に入るうか・・・

「・・・貴方がカエデ様ですね?」

「あー・・・はい、様はやめてくれます?」

「いやいや、偉大な勇者様ですから・・・」

ここは理事長室、私の前にいるのは・・・理事長のガルモスだ
名前ゴツいですガルモス理事長

外見はいい人にしか見えない

・・・女性みたい

「カエデ様にはSSランクコースへ編入してもらいます」
え・・・SSランクって一番レベル高いよね・・・

ここの世界の文字すら読めないのに・・・

「あの一・・・文字とかほぼ読めないのですが・・・」

「大丈夫です、自然と覚えますから」
くそう・・・なんか可愛い笑顔・・・

「じゃ、教室へ行きましょう!」
「はい・・・」

「今日は転入生を紹介します」
「エルサせんせいー女の子ですかー? 男の子ですかー?」
「はいはい静かに」

「入ってきてー 勇者のカエデちゃんです!」
「ヨロシクオネガイシマス」

ああ、緊張でカタコトだ・・・

「カエデちゃんには・・・アウロちゃんの隣ね」

アウロちゃん・・・か・・・かわいい!

「カエデちゃんよろしくね アウロでいいよ」
「こっちこそよろしく 私もカエデでいいよ」
声も可愛い・・・

「後で校舎案内してあげる!」
「うん、ありがとう」

数分で友達になりました

第3話 友達（後書き）

長さがまだどのぐらいでいいかわからない凜莉です。

カエデちゃんは可愛い物好きです

アウロちゃんもカエデちゃんが好きなようです。

友情的にね

次は校舎案内になります しばらくは学校生活になる予定です

第4話 校舎案内はキケン

キンコーンカーンコーン・・・

授業の終わりのチャイムだ これから休み時間
アウロに校舎案内してもらったことになった

「カエデ、はいこれ」

手渡されたのは・・・ハンドガンと・・・盾？

「え・・・あ・・・」

驚きを隠せない私に、アウロがこう説明してくれた

この校舎には、「バツメ」と呼ばれるツバメに似た黒い魔獣、危険
な獣が住んでいる

どこから出るのかわからない くちばしでつついてくる
好物は「人」だという

新入生、転校生が襲われやすいので

校舎案内の時には遠距離に効くハンドガンと

攻撃を防いでくれる盾を持って歩くという校則が出来た

先生達が倒せばいいのになー・・・

「先生達が倒せばいいのに・・・って考えてるでしょ？ 凶星でしょ？」
思考を読まれていた・・・アウロちゃん恐ろしい子

「そうもいかないのよ、バツメを倒そうとした先生や生徒、魔術師
も来たわ」

「もしかして・・・」

「その通り、バツメは攻撃や魔法をすべてかわして、皆食べられて

しまったわ」

・・・マジデスカー

「・・・さ、急がないと全部回れないわよ　行きますよ」

「おー・・・」

この校舎は4階建てクラスはFからSSまで

1Fには全クラスの下駄箱、体育館、Fランク　意外と1階は少ないの

1Fの他の空部屋はバツメの巣になったらしい

2Fには職員室、EとD、Cランクがあり、理科室、調理室等がある
3Fには・・・

バツメがいた

「えっええ・・・えええええ!？」

「カエデ、下がってて!」

アウロは見事、一発、二発とバンバン命中していく

時折髪から見える耳はなんとなく少し長く尖っていたように見えた

バツメはあっという間に倒された・・・というより気絶した　しばらくはおとなしいだろう、と

気を取り直して3Fには、BとAランクがあり、図書室、音楽室、
図工室(?)

ここにも1箇所、バツメの巣があった・・・

4FにはSランクとSSランク、食堂　魔法訓練室　訓練室　があり、バツメの巣はなかった

「こんな感じかな？」

「ありがとー いやーバツメってデカイね・・・アウロもかつこよかつた！」

「えへへ、ありがとう あと、このハンドガンの弾は麻酔弾だから、何回かすれば寝ちゃうのよ」

「倒さないの？」

「バツメは一応ここにしかないから・・・無闇に倒してはいけ
ないの」

「あつ・・・カエデ！急がないと授業はじまっちゃう！」
「うわ・・・いそげー！」

第4話 校舎案内はキケン（後書き）

バツメって名前はほぼ適当に決めた凜莉です。

魔獣とモンスターどっちがいいかなーなんて考えてたら
アウロちゃんエルフ説誕生

次回は魔法、語学、武術の特訓（授業）にはいります
ではではっ

エルフってのは美人でスラリとしてて弓とか得意で耳が長くとん
がってるよ！

（長くないのもいるけど）

S e c r e t s t o r y 1 楓はどこ？（前書き）

こちらは本編とは違う番外編的なものです。

第1話にて置いてけぼりのひよ視点にて進めていきます

Secret story 1 楓はどう？

「・・・楓？」

楓が消えた・・・そんな・・・

そうだ・・・！本！ 私も本を見れば・・・

本を開ける 私の目の前に広がるのは
真っ白なページだけ

前ページ白、もちろんしおりが挟んであったページも・・・

「ひょ？どうしたの？」

「・・・ごめん、頭が痛いので、保健室行ってくるね・・・」
「お大事にー」

どうしよう・・・楓が・・・

どこいっちゃったの？楓・・・

「へ・・・ヘックション！」

頭痛いと思ったら・・・風邪か・・・

あれ・・・本棚の本が落ちてる・・・ひまつぶしに読んでみよ・・・

【 】

この本名前がないな・・・まあいいや・・・

寒い・・・ベッドで読もう・・・

「私はあなたよ　あなたは――」

「わ・・・た・・・し・・・」

これ・・・【罪】だ・・・謎も、なぞなぞみたいなんだね・・・

あれ？私もしかして消えちゃう？　妃和、人生最大のピーンチ

「うー・・・」

ここどこ？真っ暗で何も見えない・・・
ザアツ・・・

「冷たい・・・風？」

光だ・・・眩しい・・・

ここが消えた後の世界なのかな・・・

楓にも会えるかな・・・

「おおお！貴方は――」

S e c r e t s t o r y 1 楓はどこ？（後書き）

ひよちゃんも異世界入りいたしました

会えるようにしておかないとなあ・・・

でも当分先になりそうです。

第5話 実力 奇跡 まぐれ

「ハーイ、今日はー魔法訓練をしまシヨウ！」
「はーい」

前にいるのは訓練担当のシヨウ先生 外国人っぽい金髪に青い瞳・
でもかつこいい女の人

「カエデ、行こ？ 遅れちゃう」

「あ、アウロまってー・・・」

思ってたんだけど足速いね、アウロちゃん

マジシャンルーム
「魔法訓練室」

「ハイ、今日は回復魔法と氷の槍を訓練しまシヨウか」
ヒール アイススピア

ひ・・・ヒール？ハイヒールのこと？・・・なわけないなあ・・・

「カエデちゃんはマズ、ワタシと一緒に基本を学びまシヨウ」

「はい」

魔法というものは、自分の精神の一部に、魔力マナが存在し、その量は
人それぞれ

多ければ多いほど高レベルな魔術師に、少なければ補助程度の魔法
が使えるようになる

異世界から来た者は使ってみるまで未知数 ある者は全くなかったり
ある者は多すぎてオーラがでてたという・・・

上手に使えば使うほど 魔力マナを増やせる

「わかりましたか？」

「はい」

レッスン1・魔力を氷球アイスボールにしてみよう

「自分の魔力を頭で氷球をイメージして・・・手に・・・こう・・・」
フワ・・・

少し小さめだが1つ、氷球ができた　なにこれ楽しい！
もう一回・・・

フワ・・・

少し大きめのができた　シヨウ先生どうですか？

「ワオ・・・」

驚いてる・・・何かした？

「素晴らしい！素晴らしいヨ！」

「どうも・・・」

「次はこれと、これ、そうそうこれも！」

3つも無理ですよ・・・

「うん、ここまで出来れば皆と同じく授業ができそうデス」

「ど・・・どうも・・・」

覚えた、というか覚えさせられたのは
回復魔法と氷槍アイススピアそして水の壁ウォーターウォール・・・
最後のは防御魔法らしい・・・

まだ終わらない授業　次は臨時で武術訓練だそうな・・・

そういえばシヨウ先生、これは実力だろうか・・・それとも奇跡・・・
まぐれ・・・？

とつぶやいていたけど、なんの意味かはわからないや

第5話 実力 奇跡 まぐれ（後書き）

魔法の名前が思いつかない凜莉です。

だんだん罪と関係なくなっている気がします
勉強して魔王に打ち勝つんですよ！きつと！！

次回はシヨウ先生のふつとばして次、いきまーす

第6話 種族

「あ、カエデさんこっちこっち・・・」

担任のスズ先生・・・なんだろうか・・・まさか怒られるのか？

「はい、ここ！今日からここがカエデさんの家ですよ」

木の寮？変なのー

「部屋は・・・うん、アウロさんのところが空いてるからそこにしましょう」

わーい アウロと一緒にだー

「アウロッ！ 寮、一緒の部屋だよー！」

「・・・えっ？や、やったね！」

何か焦ってるみたいだけど・・・まあいっか

「アウロって髪ながーくてふわふわで綺麗な金髪だねえー目も綺麗な青だし」

「そうでもないよ、カエデの髪の色の方が綺麗よ？」

「クスクス・・・」

「・・・」

「どうしたの？」

「カエデにだけ、教えてあげる 皆には絶対秘密だよ？」
「うっ、うん」

アウロは真剣な顔でいつもよりも低い声で言っていた
頷くことしかできなかったし 秘密を守る事を誓うことしかできなかった

「・・・これ」

アウロは髪を上げると、今まで見えなかった耳が見えた
その耳は普通の人よりも、少し長く、尖っていた
「エルフ」という種族は皆美形でスラリとし、耳が長くとんがって
いて弓や魔法が得意な種族・・・

「私ね、エルフなの・・・小さい頃耳が原因でいじめられて・・・」
「ふーん？ 私はかつこいいと思うな それにアウロはアウロだし
！」

「・・・ありがとう！」
「うん！」

そういえば・・・後3日でまた冒険に行くんだよね・・・
「・・・ねえアウロ 勇者だから、もうすぐまた旅にでるんだ」
「・・・そっかカエデ、勇者だっけ・・・」

「だから、その時、一緒についてきてくれない？」
「え？ そんな・・・私なんて・・・」
「アウロじゃなきゃダメなの！」
「・・・んじゃ、よろこんでついて行く！」
「ありがとう！」

「ハイそこー、はやくねまシヨウ！消灯時間はすぎますヨー！」

「あ、シヨウ先生・・・はい おやすみなさい・・・」

「怒られちゃったね」

「ねー」

「んじゃ、おやすみアウロ」

「おやすみ、カエデ」

魔王を倒すのに必要なお供は人数は最低4人って村の人、言ってたよね・・・後3人・・・どんな人だろ・・・

【罪】の正体って・・・なんだろう

そう考えているうちに、眠っていた

第6話 種族（後書き）

今日のあとがきは特になにもないです

次回は冒険へ出発です！

残り3人はどうしよう・・・

第7話 出発

「カーエーデ あーさだよ？」

「ほげ・・・？」

時計を見るとまだ午前5時半・・・目覚ましもなっていない・・・？

「おはよー！」

「おはよー・・・まだ早いんじゃない？」

「私はいつもこうだよ？」

アウロちゃんいい子なのね・・・眠い

「着替えたかにやー？ ついてきてー」

『にやー』・・・だとう・・・くそう・・・かわいい・・・

「的当て」

「ここはねー、まあ命中率を上げるための場所！ 私は毎朝行くんだ」

「へー・・・だからバツメとの戦い上手だったんだ・・・」

「そうでもないよー／＼／」

いや、普通に凄かったです

魔法、弓と遠距離物ならなんでもOKなここ、特訓にはもってこいだ

「・・・カエデもすごいじゃん！初めてでしょ？」

「もとからこついうのだけは得意だったから・・・」

「お、アウロ、そろそろ朝食の時間だ、行こう？」

「そうね、いきましょー」

今日のメニューは「スズノメ ライスパン アイ サカナ」

「スズノメ・・・？アイ・・・？」

「にゃー！今日は私の好きなおさかにゃー！」

！？

「あ・・・昨日言い忘れてたけど、私はエルフと獣人のハーヒューニマルフなの」

「獣人ってあれ？猫とか犬とか、動物の手足とか、耳とか尻尾があるんでしょ？」

「うん・・・私はエルフだけど、魚とかみると・・・耳としっぽ・・・」
アウロには可愛い猫耳としっぽ

余計可愛いね・・・

「あ、いたいた、お二人とも、こっちへ来てください」

「あ、はい」

「わかりました」

が・・・ガルモス理事長・・・私達なにかしました！？

「理事長室」

「えーっと・・・カエデさんは今日の午後に冒険へ行くということでしたので・・・」

手渡されたのは入学の際一時保管してもらってた鎧・・・なんかグレイドアップしてる

剣もかっこいいし・・・

「で、アウロさんはカエデさんと一緒に行く、ということだったの
で、アウロさんにも」

おお・・・動きやすそうな鎧！弓矢もかつこいい！

「「ありがとうございます」」

「・・・ガルモス理事長、何故私が旅に同行するのを知ってるのです
か？」

「んー・・・私の能力だから、ですかね」

「そういえばそうでしたね」

なんのこっちゃ・・・

「・・・さておき、カエデ様にはこれを、是非読んでください」
3冊の本 古そうだがとてもすごい物と見える・・・

「さあ、二人共、皆に気づかれないうちに行ってください」

「「はい」」

「気を付けて・・・」

これから、どんな冒険が始まるのかな・・・

第7話 出発（後書き）

どうも、凜莉です

やっと学校編終了です。

これから冒険編へと移りますー
ではー

第8話 特訓の成果

ガサガサ・

「そこかあっ!!」

ドシュッ

・・・ドサッ

「わーい!スライムにあたったー」

「その調子にやー カエデー」

「アウロ、それいつまで続くの?」

「それがわからないのにや・・・ごめんね」
可愛いからよし、としよう

「あ、なんか落ちてる」

「「スライムパール」?綺麗だしいつか」

「そんなものがあるとは・・・しらなかったにやー」

「とりあえずしまっちゃおうねー
：水晶空間：」
クリスタルルーム

ついでなので3冊の本も収納

「カエデー 特訓しよっか! 私についてきてね」
天使のような微笑み・・・怖い 後獣人も治ってるし・・・
ヒューニマル

「ミギヤアアアアア!!!」

私の叫び声が森中に響いた

「ア・・・アウロさ・・・キツいで・・・す」

「んー・・・さっすが勇者力エデ！上達が速いね」

「それは・・・どうも」

「日も暮れてきたし、寝よつか」

「テントとかは？」

「ミニマム・ルーム
：圧縮部屋：」

出てきたのは・・・って・・・みえない・・・

「んーと、『ただいま』って言うてね 私はお先にー ただいまー」
シュポーン

あれ・・・アウロ消えちゃった・・・？
と・・・とりあえずこう？だよね・・・

「ただいまー」

「おかえりー」

「広・・・どうなってるの・・・？」

「んーっと、学校で習ったんだけど、これは瞬時に小さな家を造り、
私達が小さくなって入るの」

「へー・・・」

「定員は2人まで 『ロック』って言えば、外からの攻撃を防いで
くれるの」

「すげー」

「出るときもロックって言えばいいんだよ。 ロック！」

カシャン

「おー・・・」

「さ、寝よう」

「はい おやすみー」

「おやすみー」

「・・・デ・・・カ・・・デ カエデ！」
「はいいい！」

「おはよ」

「おはよー」

「朝ごはんできてるよー」

「おいしそう！」

「んじゃ、食べ終わったらまた特訓ね」

「え・・・」

今日も魔法、魔力^{マナ}を効率的に使う方法・・・武術、射的と特訓しました。

地獄です

アウロちゃん凄い・・・

そんな日が続いて3日目・・・

バサササ・・・

森中の鳥が飛んで行き、動物達は皆逃げた

「ガアアア！」

低く、恐ろしい声　森が揺れている様だ・

少し小さめの火竜だ
ファイアドラゴン

小さくても威力は凄い物だ・

「カエデ！氷属性魔法を使って！」

なるほど、火は氷（水）に弱いのか・よし・

アイスボール
：氷球：

5個までチャージできる便利な魔法だ　しかも他の氷属性魔法とな
ら重なってもOK

これだけじゃ、倒せない・
アイススピア
氷槍だな・

アイススピア
：氷槍：

・よし

「！！！」

「アウロ、危ない！」

「・・・え？　ぐっ・・・！」

「アウロ！」

「カ・カエデ、早く撃って・・・」

「わかった・・・」

アウロは幸い爪がかすっただけだったが血は結構出ている
早く倒しないと・・・

「いつけええ！」

パキイッ

パリーン

どうやら氷の彫像になって、砕けたのだろう 跡形もなくなっていたのだから

「・・・つよし アウロ 大丈夫？」

「う・・・うん」

「：対象アウロ： ヒール：回復魔法：」

アウロの怪我が消えていく・・・でも結構魔力マナを使う魔法だからそう何度も使えないのが残念だ

「・・・ありがと、カエデ」

「よかった」

「すごいよ？カエデ、あれ、結構大変なのに・・・しっかり命中してた！特訓の成果かもね！」

「そうだね、アウロのおかげだよー！」

「クスクス」

「さ、今日はもう寝よう？もう日も暮れてきたし、疲れたでしょ？」

「そだね」

「ミミマム・ルーム
：圧縮部屋：」

「「ただいま」」

「ロック！ んじゃ、おやすみなさい」
「うん、おやすみー」

「あれが・・・」勇者「カエデとエルフと獣人^{ヒューニマル}のハーフ、アウロか・・・」
「ふーん、なかなか面白そうじゃん？」

第8話 特訓の成果（後書き）

少し長くなってしまいました！

怪しげな二人組・そして新しい魔法、そして実戦という
なんというか、長かったです！

次はもうちょっと安定しないかなあ・

次回も進展する予定です！

「追記（？）」「この回は誤字脱字が多いです・気づいたところは
直しました

が・・・まあまあたたかい目でみまってください・

第9話 二人組

「うーん・・・」

「どうした？シー」

「・・・おなかすいた」

「・・・」

まあ、シーの言ってる事は頷ける　勇者一行を追尾して3日目・
ほぼ何も食ってないからな

・俺も腹は減っている

「あ！オリス！勇者達移動してる！ボク達も行かないと見失っちゃ
う！」

「わかった、行こう！」

「ん？」

「どうしたの？カエデ」

「なんかみられてるよーな・・・」

「・・・やっぱり？」

「まあ・・・食材とか、色々なくなってきたから街へ行こう？」

「うん・・・大都市「リーエン」へ」

「ふーん？リーエンに行くのか・・・ボク達はどうするの？・・・って
あれ？」

「まって・・・ボクをおいてかないでえー！」

「合計2000Lいただきます」

「はい」

「おつりの500Lです　ありがとうございます」

「こんなもんかな？」

「よし、じゃあ重いだろうからしまっ？」

「そうしましうか」

クリスタルルーム
「：水晶空間：」

ドサッ

「ありやま・・・本が落ちちゃった・・・」

あれ？これどつかで・・・

「チッ　チッ　チッ　チーン」

あの時のか！

「この本、読めないんだよなあー」

「どれどれ？・・・あ、私読める」

「読んでっ！読んでくださいアウロ様！」

「そんなことしなくても読んであげるよ」

アウロちゃん苦笑い　引かれたっ

・・・勇者である貴方に託す　私の知識　仲間の力を借りて　読める
この本　仲間は大切

それもまた重要　勇者には読めぬよう術がかかっている　術の
奥に

本当の知識が記されているであろう・・・

「・・・なにこれ？」

「とりあえず、カエデここで待っていてくれる？」

「はい」

・・・本には術を解くための物が書いてあった　ここに全部売ってる
から・・・すぐ戻るはず

「あ、一人になったよ？オリス、どうする？」

「・・・ここでは人が多すぎる」

「了解 二人のほうが楽しめそうだしね」

「ただいまー」

「おかえりー」

「よし、準備は大丈夫・・・」

「一回森の方へ行こう」

「わかった」

「雲の裏 影の裏 鏡の裏 元に戻せば皆表 元の姿を現せ：ファイ

ア：！」

パンツ

何かがはじけるような音・・・本は・・・

「うーん・・・読めるけど相当難しいな・・・今度でもいい？」

「いつもでもいいよ？カエデの好きなときにしよう」

「んじゃ、その時まで：水晶空間：・・・にしまつとこ」

「よし、今だ！」

ガササツ

「！？」

ファイアランス

「：火槍：！」

早い・・・！何者・・・

「あつっ・・・」

「ウォーターアロー」

「：水矢：」

バシャッ

「・・・？」

「コンニチハ、カエデさんアウロさん」

「何者？」

「こいつら、魔王の手下かもしれない・・・カエデ気をつけて！」

「うん・・・」

「はいはい、あせらないでー」

「・・・ここ数日全て監視させてもらった」

「うん とりあえず自己紹介ね！ ボクはシー＝ロンア！シーって呼んで！」

「・・・俺はオリス＝ラ・リオン オリスと呼んでくれ」

そついわれましても・・・フードで顔見えないです

シーがアウロの方をじーっと見ている そして何かに気がついたように顔をしかめる

アウロは少し驚いた顔をして、笑顔をシーに見せる

そしてシーは何事もなかったかのような顔をする

「今の攻撃は何だったの？」

「んーサプライズ」

「・・・」

「アホ、今の火は強すぎだ」

特に害はなさそうだけど・・・何なんだ？

「とりあえず、魔王まで連れて行ってくれないか？」

「カエデちゃん、耳かして」

「？」

小声でシーはこう言ってくれた

「オリスは仲間にしてくれ、って恥ずかしいから冷たく言ってるんだよー」

「ぷふっ・・・！」

「シー・・・お前話しただろ・・・／／／」

「顔真つ赤だよオリスー！」

「てめ・・・：ライトニングボール雷球：」

「ミギヤアアアアア！」

「ひどい・・・ひどいよオリスウウ・・・うわぁぁん」
ないちゃった・・・

「私は仲間にしてもいいと思う」

「アウロもそう思った？よし、決定だね オリス」

「何だ？」

「仲間にしてあげる！よろしくね」

「・・・こちらこそ頼む」

「うわぁぁん」

まだ泣いてる・・・

「特にこいつのことを・・・」

にぎやかになりそうだ・・・そして顔が気になるー！

第9話 二人組（後書き）

というわけで、仲間が増えました！

クールで照れ屋のオリスと軽いシーです

では、次回に続く

Secret story 2 楓の立場と私

「あーあ・・・楓、どこにいるんだろー」

ここが消えた後の世界・・・かな？ゲームみたい
しかもこんな格好だし・・・

ここに来たとき、私は黄緑のローブのようなものを着ていて
胸には緑のネックレス

髪は白で目は緑・・・

そして村人は私を「勇者のお共様」なんて言ってた
勇者って誰なんだろう？

とりあえず勇者がいるらしいところへ行こう

「へ・・・ヘックション！」

「カエデ大丈夫？」

「うん、誰かが噂してるみたい」

「無理はするんじゃないぞ？」

「ボクがあつたためてあげるー！」

「ありがとう」

・・・ひよ元気かな？

ガサガサッ・・・

「やば・・・敵？」

（じー・・・）

ちっちゃい妖精みたいなの・・・見てる

「ご主人様！私を旅のお供につれていつてください！」

「え・・・」

「私が・・・ご主人？」

「そうです ご主人様はそのネックレスを持っているからです！」

「この緑、赤、青に光ってるやつ？」

「そう、そうです 私は風の精霊「カンゼ」と申します！」

「んじゃーよろしくね、カンゼ」

とりあえず害はないし、多いほうが安全だね

「やっと街の森まで来た・・・」

「あ、あれは勇者様達ですー！」

「え、嘘？」

「あそこですー」

「あー・・・あれ？ 楓？・・・に似た人かな」

「・・・！！？・・・」

何言ってるか聞こえない・・・

うーん、違う人と勇者のお供かな？

「んー・・・と街で買った1ヶ月、絶対に取れない発信機のような粉？をかければいいんだっけ」

「そうですー 私がやってきますー」

「おねがーい」

スイーツ

パラパラ・・

「ヘックション！」

「クシュン！」

「どったの？二人とも」

「花粉かな？」

さて、行きたいけど私はちょっと用事を片付けるかな

「カンゼ、残りの精霊は何匹だい？」

「後・・2です！」

「りょーかい んじゃ、いこう？」

「はいご主人様」

勇者との再開は・・後2週間後くらいかな

S e c r e t s t o r y 2 楓の立場と私（後書き）

今回も番外編です！

ひよ目線です

次回は本編へ進みます

第10話 氷の谷

「ねえ、二人とも」

「何だ？」

「なーに？」

「いつフード取ってくれるの？顔みたいんだけど」

「いいよ」

「・・・仕方あるまい」

パサ・・・

シーは獣人茶髪ヒューニマルに青い目アウロと違って語尾に「にゃ」はつかないみたい

オリスは数少ないシアンだった 黒髪と白い目 白い目はシアンの特徴だ通りで強いわけだ・・・

「んー、オリスさーさつき目みえたけど、茶色だったよ？」

「それは魔法で隠してるからだ」

へーそんなものもあるのか

「魔王の城ってどこにあるのー？」

「ん、んーっとねここから北に行って氷の谷に行き、その西のほうに行くと、火の谷があるから・・・」

「そこを通り、北へ向かい海を渡ると魔王の城がある・・・であつてるか？カエデ」

「おお、あつてるあつてる」

「ねえ、アウローごはんまーだ？ボクおなかすいたー」

「あ、できてるよー」

「わーいシチューー！おいしそう」

「いつも感謝する」

「アウロごめんね、ありがとう」

「ううん、他にできることはないから・・・」

「うーん・・・！おいしかったー！」

「美味だった」

「ごちそうさまでしたー」

「氷の谷へ行く準備しよー」

「わかったー」

「もう準備済みだ」

「私も」

じゃあ準備してないの私とシーだけ？　なんか悲しい・・・

「ボク準備できた！」

「よし、出発だー！」

く氷の谷にて

「・・・さむつ　みんな大丈夫？」

「カエデ・・・ボク寒いの手・・・」

「私も・・・カエデー寒いー・・・」

猫は寒さに弱い！　って言うてる場合じゃない！

「ホット：暖：」

「オリスーありがとー！ボクら獣人にはぴったりの魔法だよー」

「あれ？寒くない？カエデは？」

「私も平気」

今は魔法で体の周りを熱の結界で暖かいらしい
何でもありですね・

ピシッ

「痛っ！何か当たったー」

「氷の粒？」

パシッ

「わ！」

ピシパシピシピシ

「どんどんあたってくるー！痛いー」

「ここに勝手に入っちゃダメ」

女の子？こんなに寒いのに裸足で青と白のワンピースを着てる・

「君は？」

「・・・言えない とりあえずここに入っちゃダメ 勇者以外入っちゃダメ 他の人一回出て行って」

愛想がない話し方なのね・・・そして私以外は出て行けと・・・何なんだ！

ああ、みんなそそくさ行ってる・・・

「みんな行ったから話す ここは氷の谷 私はここの姫アイシア
勇者には この氷の精霊託す」

女の子の後ろから小さい水色の髪をした精霊が飛んできた

「ご主人様ー！」といいながら私のところへ行く

「死なせたりしたら 承知しない この谷 滅ぶから」

そんなに重要なのなら 渡さないほうが・・・

「渡さないと 魔王まで行けない 残りの精霊2匹集める 火の精霊と風の精霊」

「アイシア様、そのことですが、精霊使いと思われる人が風の精霊を保護したようです」

「・・・そうか ならば後は火の精霊と 風の精霊を保護している精霊使いを 探せ」

「わかりました」

「用件はもう終わった 早く世界を救ってくれ その子も頼んだ」

氷の谷の外ではみんなが待っていた

「おかえりー」

「遅かったね、大丈夫？」

「その後ろのは？」

「私、氷の精霊 アインゼと申します！」

わいわいと盛り上がってるけど
みんなは気づいていないみたい 誰かにつけられてる感じがする・・・
気のせいかな・・・

第10話 氷の谷（後書き）

祝10話ー！（ー）

どんどん進めていきますb

アイシアさんカタコトだけでも許して
冷たいイメージでなかったのです・
・

次回は火の谷へ進みます

第11話 火の谷は暑い

焼けるような熱い日差し
の太陽
じめじめとまとわりつく湿気

そして地面が不安定な砂 見渡す限り砂・砂・砂

私達はそんなところにいる

「あつ・・・」

「暑いです・・・私暑いのは苦手・・・」

ああ、アインゼが死にそう・・・

水筒に入れておこう・・・汚いけど

「大丈夫？」

「な・・・なんで3人は平気なの・・・」

「私は一応獣人の血も引いていて、暑いところは平気」
ヒューニマル

「ボクも」

「俺はどこにでも対応できる」

うらやましい・・・と思ったのはアインゼも同じだったようだ

「うわ・・・一段と暑い・・・」

「アインゼ、大丈夫？」

水筒の中からひんやりとした空気と声が聞こえる

「快適ですー」

ふと見ると、アウロとシーもこの暑さにはかなわないようだ

「ここは暑いわね・・・」

「暑いー！ボクここやだー」

「我慢しろ」

オリスさん容赦ないです・・・シーが半泣きしている

「ようこそ、勇者ご一行 わらわはこの主 ファインじゃ」

真つ赤なドレスに金髪の髪 まさに女王というイメージだ

「さて、ここでは暑すぎるであろう？わらわに着いてくるがよい」

そう言われるがままに着いていくと、さっきよりは涼しい場所に来た

「ここなら幾分か良いであろう？ここは火の谷、暑いのは仕方がないことなのじゃ」

「はあ・・・」

適当に返事をしておこう・・・

「ファイリア、来なさい」

「はい」

女王にそう言われ来たのは小さい精霊 これが火の精霊なのだろう

「初めまして 私はファイリア、火の精霊です」

「これからよろしく」

「よろしくね」

「よろしくねー！」

「・・・」

「さて、カエデよ 残りの精霊はあと何じゃ？」

「後は風の精霊を保護した精霊使いを見つけるだけです」

「ふむ・・・そやつならもうじきこちらへ向かうそうじゃ」

お、ラッキー

「後30分ぐらいであろう、しばらくこちらでお茶を飲もうぞ」

精霊使ってどんな人だろう・・・

第11話 火の谷は暑い（後書き）

さて、のこりは風の精霊！

いきなり急展開（笑）しますのでご期待ください！

では次回に続く・・・

第12話 久しぶり

「うーん・・・まいったなあー」

氷の谷で精霊をもらおうと思ったら、精霊は勇者の所にいるなんて・

・

「ご主人様、火の谷に勇者様がいます、合流しましょう!」

「本当!?今すぐ行こう!」

勇者との再会は予定よりも早くなっ たなー

楓も探さないとだし・・・

「精霊使いつてどんな格好なのですか?」

「わらわもよくは知らぬのじゃ・・・ただ、白い髪に緑の目らしい」

「ねーねー女王様ー男なのー?」

「よく知らぬと申しておる!」

シー・・・もうちょっと敬語を使おうね・・・

「カエデ、お茶のおかわり、いる?」

「うん、よろしくーアウロ」

「カエデ」

「何?オリス」

「幻影の魔法を教えてやる こっちへ来い」

「はい」

そっいえばオリスはシアン、簡単にバレてはいけないから、幻影の

魔法「シャインド幻影」で隠してるっけ

「シャインド幻影・・・!」

「もう一回」

「：ファイア：」

きつい・・・です

「こんなもんだろう」

私は髪を金色に目も茶色 目も少しつり目にしたこれが一番多い
土属性の格好

それに似合うように声も少しハスキーにした 別人です

「おおーすごいじゃない」

「ふむ・・・よくできておる」

「カエデすげーじゃん！」

ガサ・・・

「ふむ・・・？客人か」

少し遠くから聞こえる声

「火の精霊をいただけませんか？」

「そなたは何者じゃ」

「私は精霊使いです 勇者様達がここにしていると聞き、精霊をいただ
こうかと」

「残念だが、火の精霊は私の元にはない」

「・・・そうですか」

「火の精霊を持っている者はあつちにいるぞ？」

女王の少しからかうような声 無邪気に笑っている

どんな人かなー？精霊使い

「初めまして、私が精霊使い ヨヒリです」

「初めまして」

顔をよく見ると 見慣れた顔

貴方は 妃和ね・

私の幻影魔法もたいしたものだ

一番勇者らしい私に近づき、ひざまずいた

「勇者様、氷の精霊と火の精霊をいただけないでしょうか？」

「クスクス・・・」

私はつい、笑ってしまった

「何がおかしいのでしょうか」

「その堅苦しいことはしなくていいわ、ヨヒリ」

「はぁ・・・」

「さて、少し席を離れるね」

「うん、気をつけてね」

「はい」

「わかった」

「さて、ヨヒリ 精霊はただではあげられないわ」

「ではどうすれば？」

「私達と一緒に、魔王を倒してほしいの、着いてきてくれる？」

「わかりました」

「ありがとう、ヒヨリ」

「！！ どうして・・・私の名前を？」

幻影はまだといていない あんな姿は見せたくないしね

「私の名は カエデ 罪の謎を知るために魔王を倒す人」

「楓！」

「久しぶり、ヨヒリ」

「久しぶり」

そう言う妃和・・・ヨヒリの目には涙が浮かんでいた

第12話 久しぶり（後書き）

どうも、凜莉です

急展開は楓と妃和の再会でした

「幻影といたほうがいいかな」

「いや、とかないほうが面白いかも、私が」
と思ひ幻影はといていません

では、次回は精霊編最後の予定です

第13話 3人の精霊

再開した私とヒヨリ みんなの下へ戻り、話をした
ここまで何があったのか 一つ一つ

「・・・さて、もう行こうかな」

「そうだな もうここにいる必要も無くなった」

「女王様ーいろいろありがとねえー！」

「無礼者！なんて口じゃ！」

シー・・・最後まで・・・

「それじゃあ、この世界を頼んだぞ」

そう言っ て女王様は戻っていった

「さて、2人の精霊ちようだい」

「はい」

「あっ！カンゼだー！」

「2人とも久しぶりー！」

精霊達はキャッキヤとはしゃいでいる

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何かひそひそと話しているようだ

「カエデ様、その剣をお借りします ここにおいでください」

「ん、こっ？」

「そうです」

「ご主人様はこのネックレスをカエデ様の剣の上に乗せてください」

「わかった」

「せーの・・・」

「^{ガイ}融合：」「」

そして強い光が私たちを包んだ

「うわ・・・っ」

「まぶし・・・」

「ボクまぶしいのくらいー！」

「・・・」

「キヤー」

「・・・おわり？」

「カエデ・・・あれ！」

「どうしたの？アウロ」

そこには、さっきまでいた精霊達がいなかった

ただそこには、黄金に輝く剣と ネットクレスが置いてあった

「・・・今の魔法は物を3つまで融合できる物 彼女らと剣と光を」

「そして、あのこたちとネットクレスと光を融合したであってるよね
え？オリス」

「そうだ だがいきなり出てくるのは驚くからやめてくれ・・・シー」

「そうだ、カエデ、ヨヒリ、剣とネットクレス、どう？」

「んー・・・力が強くなった気がする」

「えーっとな、^{リバー}実態化って唱えてみてー」

「^{リバー}実態化」

そこには、アインゼとファイリアが剣の周りに、カンゼはヨヒリの肩にとまっている

「呼んでくれてありがとうございますー」

「こうすることで私達と会話ができるので、いつでもどうぞ」

「でも、1日3回です。これだけは守ってくださいね」

「わかった」

「うん」

「もう私達はさっきので疲れたので寝させてもらいますー・・・」

あ・・・消えちゃった

「さて、みんな、魔王に向かって出発！」

「」「おー!」「」

アウロ、シー、オリス、ヨヒリ（ヒヨリ）・・・あのさあ、次、どこ行けばいいの？

第13話 3人の精霊（後書き）

さて、精霊編終了です
再び旅編にもどります

最近スランプ気味・・
がんばって進めていきます

第14話 次の行き先

「どこに行けばいいの？」

そう聞くと皆黙ってしまった

「ボク、知らない！」

「カエデ、ごめん・・私も」

そしてシーとアウロに続き

「俺も・・」

「私も」

・・オリスやヨヒリまでどうしましょう

「オリスーなんか面白い話してー」

「・・じゃあその武器やネックレスについて話そうか」

オリスが指さしたのは私の剣とヨヒリの剣

「わーい」

オリスは話してくれた

私の剣は氷の精霊アインゼと火の精霊ファイリアが宿っている 通称精霊武器

精霊武器は昔精霊使いが誤って精霊と短剣を融合させてしまったためできたもの

力は精霊の属性も加わり、強大なものになったが、その精霊使いは争い等を好まない人だった

精霊使いは必死に元に戻す方法を調べた だが手がかり一つ、つかめなかった

そして精霊使いは老い、その精霊武器を泣きながら、悔やみながら短剣と自分の気に入っていた

ネックレスを埋め

この世を去った そしてネックレスは精霊の住処になり遠くへ行き

短剣は錆び、朽ちた

「という伝説みたいな話があるんだ」

「ヘーアウロ知ってた？」

「全然、精霊使いのヨヒリさんは？」

「ヨヒリでいいよ、アウロ　んー全然知らなかった」

「ボク、オリスの話面白いから好き！」

シーは論外ね・・・

「そして、そのネックレスがヨヒリのつけてるやつなんだ」

「そうだったんだ・・・」

「そういえば精霊武器・・・だっけ？これの名前つけたほうがいいよね」

「そうだな・・・気に入った名前をつけるといい」

「じゃあ、私もネックレスに名前つけてみる」

ヨヒリはすぐ決めた「カレス」カンゼの力とネックレスのレスをあわせたらしい

私は悩みまくった　こういうのは苦手なんだ・・・

「よし、決めた！」

私は「アイリア」に決めた　アインゼとファイリアを合わせたもの
気に入ってくれたかな

「そろそろどこか行きたいね」

「特訓もかねて迷いの森へ行ってみない？」

「いいんじゃない？」

「俺も異論はない」

「ボクもー！」

「次は迷いの森 出発！」
「「「「おー！」」」」

第14話 次の行き先（後書き）

ちよつと遅れたし短いですー

そろそろネタが尽きてきましたorz

次回はもうちよつとゆっくり進めたいです

第15話 彷徨う森

「こ・こど・．．．こおお!？」

「迷いの森」

オリスにシー・ヨヒリやアウロまで同じことを言った
そう、ここは迷いの森

「道わかるー．．？ なんてね」

ヨヒリが呟く 道がわかっていたら苦労しないもの

「私わかるよ？」

「うええ!？」

早く言つて．．．

「ん!」

「どうした？シー」

「何か・感じる」

「アウロも？」

「ヒューミナル 獣人は嗅覚・聴覚・視力がとてもいいから・ところで、何が来る？」

「うん・助けてつて・言ってる？」

「ボクは・つれてく って」

「助けて？連れてく？ うーん・」

「来た!」

ガササッ

『タスケテ タスケテ ココハ ドコ・・・？』
『ミツケタ ミツケタ ツレテク ニンゲン』
『ア”ア”ア”！！』

敵は・・・人・・・ゾンビの類だろうか もう一匹は見た目でわかる・・・
死神だ・・・

もう一匹・・・こいつはなんだ・・・？

まよいびと
『迷人！』

「う・・・死神じゃん 運悪いねーボク達」

「行こう！ オウカ・クサリ 桜華・鎖！」

ヨヒリが唱えた魔法 それは敵全員に向かう
桜が・・・鎖のように・・・動きを止める

『ココ・・・ハドコ・・・』

まよいびと
迷人の目から涙・・・？ 死神は・・・暴れている

『ア”ア”ア”ア”！！！！』

「うるさ・・・っ・・・」

「オリス！大変だ・・・こいつ・・・みえない！！？」

『ニクイ ニンゲン ツレテク アノヨ ツレテク・・・！！』

「お前が帰つてろ！ホーリーアロー 光矢！」

『ウゲア・・・アア！！？』

「死神は黙ってあの世行きい！ ライトフラワー 光花ア！」

『グアア・・・ア』

アウロちゃん怖い

「・・・・・・・・・・」

ヨヒリなにか呟いてる・・

『ア”・・ア”ア”・・アアアアアアアアアアアア！』
「うる・・さ・・い」

見るからにシーの顔色が悪くなっている

「なんなんだこいつ・・！」

「哀れな迷^{まよひびて}人・・お前の還る場所へお行き 天^{ライトゲート}門」

『あ・・たたかい・・ やつと・・かえられる・・』

迷人が空のゲートに消えていく・・？ 迷人・・貴方達は一体？

「チツ・・何処行つた！」

そんなことよりこつち！！

「いた！」

剣を振り下ろす 無事命中したようだ

『ア”ア”・・』

「見えるのか？」

「うん・・皆は・・見えないの？」

「ああ・・」

こいつはまるで影のように暗い・・私の目はここにきてから見えないものが見えてしまう

影・・？ そうか・・

「^{ライト}光！」

辺りが明るく照らされる その目の前にはヤツがいた

「今だ！」

「剣術 一刀両断！」

ヤツを二つに切り落とす ヤツは何も言わず 塵となって消えた

「ハア・・ハアッ・・」

「シーは？」

「ボクは・・・大丈夫・・・」

私達は皆クタクタだ ミニマム・ルーム 圧縮部屋で一晚過ごし、出口へと向かった
抜け出したら・・・そこは 一面砂

「さ・・・砂漠!？」

「あつちに村がある!いつてみよ」

「・・・見ない顔だな?ここに何用だ」

第15話 彷徨う森（後書き）

いやー、ずいぶん遅れましたー
と・・・とりあえず

魔法がいつぱいできました・・・

楓のメモはしばらく放置です すいません

では

第16話 砂漠の街 リヴァン

「・・・見ない顔だな？　ここに何用だ」

そこに立つのは見知らぬ女性
え・・・っとどうしたらいいかな？

「俺達はその迷いの森で修行中にここに出た」
オリスつてば冷静　うらやましい

「ふむ・・・そこのお前」
短剣を顔の前に突き出された

「ハイイ？」
こ・・・声がっ・・・裏返って・・・

「その格好・・・勇者だろ？」
なんで知って・・・

「後そのローブ男」
今度はオリスに剣を向ける

「お前、シアンだろ？」
シャインド
幻影を解いてた私と違い、オリスは解いてなかったはずだけど・・・
でもオリスは平然としている　それは当然だと言うように

「お前等は勇者一行か・・・」
「ところで、君はなんて名前？」

シーが空気を読んでるのかわからないような質問をしている

「私はリオと言う お前等の名は知っている」

「そうでしたか・・リオさん、この先のリヴァンまで案内してくれます？」

アウロが口を開く

「ほう・・お前は知っているのか・・いいだろう、着いて来い」

砂漠の山をひたすら歩く そうして1時間してやっと着いた
砂漠の街「リヴァン」に・・・

「まずは体を休ませろ 私の家へ来い」
そしてリオの家に招かれた

「・・ここはリヴァン 見ての通り砂漠の街だ」
そしてこの事を話してくれた

ここは迷いの森から南へ数キロ歩いたところにある街
別名「盗賊の街」 その名が着いたのは盗賊がわんさかいるからだ・
・という

そしてリオもまた、盗賊らしい

「だが私はお前・・カエデに頼みを聞いて欲しくてな」
「・・頼みとは？」

「私を旅に連れて行ってくれ」
「いいよ」

シーは即答。

「仲間は多いほうが捗る」

オリスもどうやらYESらしい

「私もいいよ」

「どっちでもいいよ、カエデの言つとおりだね」

ヨヒリとアウロもいいうた

うむむ・・・ここで嫌なんていったら絶対怒られるし、断る理由もないよね・・・

「いいよ!」

「よろしく頼む」

リオが仲間になった!!

リオは背が高く長い髪を一つに束ねた灰色の髪に黒い瞳 褐色の肌 冷たい目・・・

「カエデ、お前の武器は短剣か 短いな・・・少し大きめの剣をやる」

「そんな、悪いですよ」

「いや、いらぬ物だからな、それにその精霊武器と剣をまた融合させればいいだろう」

そこまでバレてるの!?

「・・・ここでは情報が一番だからな」

そついいながらとつてきたのは、50cmぐらいの長い剣
これは使いやすそうだ

・・・

「これでよし」

リオにもらった剣とアインゼとファイリアがいる精霊武器を融合させた

また力が強くなった気がする・・・少し光ってるね

「こうして融合を繰り返し、強化することで光が強くなる」

「へえ・・・」

「・・・」

じーっとアウロの方を見てからリオはこう言った

「アウロ、何故リヴァンを知っていた？」

「・・・私の故郷ですから」

・・・ええ！？

リヴァンが・・・アウロの・・・故郷！？

第16話 砂漠の街 リヴァン（後書き）

お久しぶりです。

展開が迷子。

そんな感じの17話をお楽しみにー

第17話 アウロ

「え・・・アウロってリヴァンの生まれなの!？」

天井を見るようにしてアウロは答える

「・・・そうよ 私はリヴァンの生まれなの」

リオは納得したように言う

「だからか・・・迷いの森の出口にリヴァンを選んだのは」

「選ぶ? 出口って一つじゃないの？」

「・・・シー、知らないのか？」

オリスが驚いたような顔を見せる なかなかのレアだ。

「迷いの森の出口は幾千とあるんだ、その中からリヴァンを選んだアウロなら・・・」

「つじつまが合うわね」

今まで黙ってたヨヒリが言う

「でもよくあんな森から道が分かったねえ」

「そうだね・・・私達にとっては同じ道にしか見えなかったもん」

「俺は知っていたが？」

オリスは平然と言う

「「当然でしょ!」」

貴方は物知りなんだから・・・

「そろそろ行こうよー」

「・・・それもそうだね、そろそろ行こっか」

「待て、その前に・・・」

「・・・」

リオがそう言っただけ、アウロの方を見る

オリスは何かを気づいたように険しい顔をする

リオがアウロの元へ行き、こう言った

「アウロ、お前の本当の名は何だ」

「・・・」

リオが言っただけ、アウロは俯いて黙ってしまった

本当の名前って・・・ということなの？

そしてアウロは何かを決意したように席を立つ

そして私達を見る

とても冷たい目で・・・

「私の本当の名は　ゼリテ・ミータ　それだけ言えば十分であろう
？」

そしてリオを見て

「お前、いつから気づいた？」

「・・・先程な」

そしてアウロの身体がサラサラと砂のように消えていく
後に残ったのは

黒く長い髪に紫の目　鋭い目つきの別人だった

「こいつ・・・二重に幻影^{シャイント}してたのか・・・」
オリスが悔しげに言う

「ふん、私にかかれば容易い事」

「アウロ・・・？」

ヨヒリは信じられないという顔でアウロに近づき、触ろうとした時、

「触るな」

「うつ・・・！」

アウロはヨヒリに向け、魔法を放ったのだ

ヨヒリは壁に吹っ飛び、そのまま気を失ってしまった

「これで分かったかしら、私はエルフのアウロではない・・・って事」
そしてヨヒリの精霊が宿っているネックレスを取った

「また近いうちに会いそうね “敵” として」

ゼリテはそう言うと言を闇の中へと消してしまった

＋＋＋＋＋

「う・・・」

あ、ヨヒリが目を覚ました

「大丈夫か？」

「・・・ええ、平気・・・それより・・・アウロは？」

リオは横に首を振る

「何なんだよアイツ！今までボク達を最初っから騙してたのか！」
「最初から・・・」

シーの言葉に私は学園にいた頃を思い出してしまった

もうあの頃には戻れない・・・

仲間を傷つけた・・・ゼリテ・・・許さない

この手で討ってみせる

「・・・行こう皆」

「もちろん！」

「ああ」

「うん！」

「・・・」

目標は魔王城！

第17話 アウロ（後書き）

お久しぶりです。

まさかのアウロちゃん黒幕です。

ゼリテ・ミータというのはイタリア語の「本当」と「悪」という意味の言葉を

もじりました。

さあ18話からやっと勇者らしくなりますよ！

第18話 新たな出会い

アイスボール

「氷球！」

ウッドソルジャー

「木兵、アイツらを切り刻め！」

次々に倒れるモンスター達

だけど・・・

「・・・ハアツ・・・これ・・・敵多くない？・・・ボク疲れてきた・・・」

「・・・魔力がなくなつた」

マナ

ヨヒリがそう言ったとたん、

ウッドソルジャー

木兵達は消えてしまった

シーもクタクタで座り込んでしまった

「カエデ、行けるか？」

「・・・当然っ！」

「援護は任せろ」

「行くぞ！」

「ファイアブレイド！」

カエデの剣から炎が出てきて、敵を切り刻み、焼き尽くす 鬼のような技

「はあっ！」

オリスは長い剣を横に一振りするだけで多くの敵が倒れていく

「リオ、そっちは大丈夫？」

「問題ない」

「・・・最後の一匹だ、行け！」

「一刀・・・両断！」

カエデは高くジャンプし、敵を得意の剣術^{スキル}で敵を倒す

一連の流れをただぼーっと見てた二人、

「すごい・・・」

「人間じゃないよねこれ・・・」

映画でも見てるように呟く二人

その時後ろから幼い声がした

「わぁ、すごい、さすが勇者さまご一行だね」

「・・・君は？」

「私はエレー、エレー＝ルーナ」

「なぜ貴方のような子がここへ？」

「私、勇者さまの旅と一緒に行きたくて・・・」

えっ！と驚いた顔で少女を見る

私も驚いたが、もっと驚いたものがある

・ ・ ・ ルーナ これは、アウロが名乗っていた時に使っていた・・・

「勇者さま 一緒に行ってもいいですか？」

少女は突然私の目の前に現れた

「!？」

突然の出来事に驚いてしまった・・・と同時に少し情けない気分になった

「エレー、君の祖先にアウロという名のものはいなかったか？」
オリスが突然尋ねる

少女は当たり前のように

「いたよ 偉大な僧侶だった」

・アウロ＝ルーナ・実在したんだ

「母親に許可は貰ったのか？」
「当然」

「・・・どうする？」

「エレー、君は今日から仲間だ！」

エレーの顔がぱっと明るくなった

「わーい！ やった！ やったあ！」

「・・・」

少し複雑な顔をして俯くシー

その後すぐ苦笑いのような笑顔を見せた

第18話 新たな出会い（後書き）

特にノーコメントで・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9549w/>

【罪】の謎

2011年12月28日21時48分発行